

金剛心

汝、金剛心に生きよ

世界も、日本も、社会も、誰も彼も、世紀末的不安と動揺の嵐の中にさまよっている。

しかし、世界は今、ほのかな曙の光に向っている。ある者はこの黎明を喜び、ある者はこの光の来ることを恐れようとも、世界は今、長い悩み、陣痛を経て、確かに正しい光の照る新しい世界を生み出そうとしている。如何に現実の暗は深かろうとも、東の空はほのかに白みかけている。

今の世ほど、真実の尊ばれる時が過去にあったであろうか。

今の時ほど、真実ならざるものの葬られる時代が過去にあったであろうか。

だが我等は、世界のあらゆる問題が、最後には、必ず、人間の良心に訴えられてのみ、解決せられるものであることを信ずる。そして、それ以外の方法で人間が動かされていることは、人間の最大の恥辱であることを信じ、来るべき日は、来るべき時代は、もつとくより深く真実のみがものを言う人間の世界を成就しなければならぬことを信ずる。

我等は仏の心臓を我が心臓として生かされる仏の子である。

仏の心臓とは、大慈悲である。

大慈悲の心臓から流れ出る血潮、その血潮の廻るところにのみ、大信心がある。

大信心とは即ち金剛心である。

和……………大和！

和の精神こそは、日本建国の真精神であった。

しかしして、金剛心とは、大和の心そのものである。

如来の大慈悲に生かされると言えば、弱者になることのように誤り、金剛不壊の信心と言え、我慢を出すことだと間違える。我慢邪見は金剛心に非ず、弱きは慈悲の心ではない。和の心なき強さと、金剛心なき弱さは、共に、仏の大慈悲より生れたものではあり得ない。

汝の心中に、自力我慢巢く、疑い邪見等が無数に動いている。寂静の楽より流れ出る仏の光によって聖化されぬ限り、それらのものがものを言う。そこに「大和」の世界は、根本から覆えされる。

甲が乙と対立して生きれば、甲は必ず乙との間に溝を感じる。たとえ乙が甲を向こうにまわして生きようとも、甲は乙に限りなく融けようとするところにのみ、甲の生きねばならぬ世界がある。

古来の聖賢は、これに敵する者をも、苦しめる者をも、皆抱いて生きようとし、あるいは生きた。彼等は一切人との間に溝を持たなかつた。いついかなる時にも「当に願わくば衆生と共に」生き、救われ、歩まんことを願つた。そしてその生活を持ち續けて一貫した。金剛心とは……こうした一道をとつてたじろがず、改めず、相續して貫くことである。大和の精神の一貫、それより外に、金剛心の相はなかつた。

しかし大地の実相は、決して大和を易々と成就せしむるようには出来てはいない。そこには、人間の我より生れる非文化的、非大乘的な根強い無明があり、障碍がある。ここに闘争がある。如何に障碍があろうとも人間の理想はこれを成就しなければならぬ。しかもそこにさまざまのげがある。そこに大和へのたたかいがある。

ここにもまた、不壞の金剛心を要する。まちがいのままに死の平和を貪ろうとしてはならない。この意味においては、古来の聖賢もまたたかつた人である。

陸軍省新聞班発行の「国防の本義とその強化の提唱」にはその巻頭において、「たたかいは創造の父、文化の母である。試練の個人に於ける、競争の国家に於ける、齎しく夫々の生命の生成発展、文化創造の動機であり刺激である。ここに言うたたかひは人々相剋し、国々相食む、容赦なき兇兵乃至曝殄ではない。この意味のたたかひは霸道、野望に伴う必然の帰結であり、万有に生命を認め、その限りなき成生化育に参じ、発展向上に与ることを天与の使命と確信する我が民族、我が国家の断じて取らぬ所である。この正義の追求、創造の努力を妨げんとする野望、霸道の障碍を駕御、馴致してついに柔和忍辱の和魂に化成し、蕩々坦々の皇道に合体せしむることが、皇国に与えられた使命であり、皇軍の負担すべき重責である。」
と言う。まことに文字通りその通りでなくてはならない。更に言う。

「最後に一言し度きは、国防の基幹たるべき我が武力は、皇道の大義を世界に宣布せんとする、破邪顕正の大乗剣であり、利己的霸道を基調とし、優勝劣敗をのみ念として動く他国の小乗剣に比すべきものでないという点である。」

まことに皇国のすべては「柔和忍辱の和魂」「大和の理想」によつてのみ動くべきである。

人生には抽象的な平和は存在しない。たたかい！たたかい！そこに存在するものは、平和への努力、大和へのたたかい、真実への歩みのみである。我が全陣營の同志よ！南無阿弥陀仏によつて和魂にかえれ！

しかして活眼を開いて、現実人生を凝視せよ。

大乘精神の玉城たるべき仏教社会すら、嫉妬、呪阻、反動、非大乘によつて埋つているではないか。たたかいだ。たたかいだ。金剛不壞の信心の腹をおしすすめてたたいぬけ。しかも仏の慈光によつて胸中のバクテリアを聖化し、あくまで一切と対立せず、敵視せず、無我の大信心によるたたかいだ。

我等の存在をして、大乘日本莊嚴のための一兵卒たらしめよ。

昭和十年の新春にあたり、金剛心を提唱して、同胞と共に生きんとす。妥協することなかれ、対立することなかれ。大信金剛の白道を歩めよかし。